

千利休書簡における人物呼称

——利休書簡の個性について——

柏 本 雄 幸

一

桑田忠親博士の長年にわたる利休書状の研究成果が、『定本千利休の書簡』としてまとめられている。⁽¹⁾二百六十三通の利休書状が集められ、その真偽についても容赦のない取捨がなされている事がうかがえる。それにもかかわらず、利休書状には、「鳴海」なる人物による代筆が含まれているとの指摘が近年なされている。⁽²⁾私などの口出しし得る事柄ではないが、代筆による言語上の問題が皆無ではないだけに、注意することは必要であろう。

一個人の手紙があの当時、二百六十余通も残っている事は、驚きである。言語資料としても注目すべきものと思わ

れる。今回は、利休書簡に現れる人物呼称を対象に、利休の呼称法とその特色について考えてみたいと思う。

呼称の研究となると、当該人物の地位とか、書き手との親疎関係、さらには、書簡の相手と差出人との間柄なども考慮に入れなくてはなるまい。書末を「かしく」で結ぶ消息と、「恐々謹言」などで結ぶ事務的な書状の違いなども考慮の対象となろう。それらの殆どは、桑田博士の解説によっている。記して感謝するものである。

「千利休書簡における人物呼称」としたが、宛名や上書の呼称は取上げなかった。書簡としての形式に左右される面があると思うからである。書面の中に出てくる呼称のみを取り上げた。

まず、利休書簡に出て来る通常の人物呼称法を取り上げる。通常の呼称法については、事例が多いので、引用や出所は割愛し、呼称名のみを列挙していくことにする。考察についても概観にとどめたい。

(一) 呼び捨てになっている呼称

(1) 本人及び身内に対しての呼称

宗易(本人)・利休・紹安(長男)・少庵(次男)・石橋良叱、良叱(女婿)・紹二(女婿)・子持(手代)・なるみ(右筆)・慶半(右筆か)・道六(子守)・源次郎(身内か)・惣三(身内か)・藤五郎(大工)

(2) 町衆や剃髪者などに対しての呼称

宗伝・宗叱・宗悟・宗二・宗及・宗久・宗佐・宗無・道薫・道祭・道清・幽斎(細川幽斎)・不干(不干斎の略)・妙喜庵(妙喜、妙庵とも)・夕庵・瓢庵・立庵・立安・紹無・示曲・りけん・法雲・釣雲・徳雲軒(徳雲とも)・一翁・三松・薬師院(薬院とも)・円乗院・円乗坊・長床坊・新坊・瀧本(瀧本坊の略)・上林惣三郎(上村、掃部とも)・平野道是・もちや道

喜・もす屋

(3) 武将クラスの人物に対しての呼称

(a) 姓と官職名によるもの

森三右衛門尉・桑原次右衛門尉・さかい左衛門尉・一柳二郎兵衛・富田平右衛門・津田四郎左衛門・石川はうき・所伝兵・牧村長兵

△略称▽青紀州(青木伊勢守秀以)・羽筑(羽柴筑前守前田利家)・惟日(惟任日向守明智光秀)・古織(古田織部正重然)・富平右(富田平右衛門尉)・猪次左(猪子次郎左衛門尉か)・木印(木下法印か)

(b) 官職名のみによるもの

筑州(前田筑前守利家)・奥州(佐々陸奥守成政)・豊州(豊後守大友宗麟)・伊せのかみ(未詳)・霜台(浅野弾正少弼)・少納言(未詳)

△略称▽弾少(浅野弾正少弼)・宮法印、宮法(宮内卿法印松井友閑)・民法(民部卿法印前田玄以)

(c) 姓と名前によるもの

一柳一介(一柳市介直末)

△略称▽羽藤(羽柴藤吉郎)・古佐(古田左介)・羽忠(羽柴忠三郎蒲生氏郷)・舟五(舟越五郎左衛門尉)・細新(細井新助)・武新(武野新五郎)

(d) 名前のみによるもの

忠三郎（蒲生忠三郎氏郷）・半介（木下半介吉隆）・小平田（柳原小平太康政）・蔵介（佐々蔵介成政）・半兵衛（未詳）・三郎兵衛（未詳）・弥右（未詳）

(e) 姓のみによるもの

島津（島津義久）

(f) 名乗によるもの

秀吉（関白以前のもの）・家康・隆景・政宗

(g) 不明のもの

才三・慶忠・与市・少半さ・兵太・矢若

(二) 敬称の助辞「殿」を添えた呼称

(a) 姓と官職名とによるもの

河尻肥前殿（河尻肥前守秀隆）・飯富兵部殿・井勘兵へ殿・堅田兵部殿

△略称▽古織殿・富左殿（富田左近）・柘左殿（柘植左京亮）・久掃殿（未詳）

(b) 官職名のみによるもの

上野殿（織田上野守信包）・肥前殿（前田肥前守利長）・出羽殿（蜂屋出羽守）・ひうか殿（明智日向守光秀）・対馬殿（山内対馬守一豊）・彈正殿（浅野彈正少弼）

左衛門督殿（堀左衛門督秀政）

(c) 姓と名前によるもの

永嶋孫右衛門殿

△略称▽蜂小六殿（蜂須賀小六家政）

(d) 姓のみによるもの

近衛殿・伏見殿・菊亭殿・三条殿・松賀嶋殿（松賀嶋城主蒲生氏郷）・徳川殿・古田殿（古田織部正）・高山殿（高山右近）・富田殿（富田左近）・町野殿（町野左近幸仍）・芝山殿（芝山監物）・益田殿（本願寺坊官益田少将か）・興山殿（興山上人）・佐世殿（毛利家臣・未詳）

(e) 名前のみによるもの

とうきち郎殿（木下藤吉郎）・三介殿（織田三介信雄）・八郎殿（羽柴八郎秀家）・藤四郎殿（未詳）・新五郎殿（未詳）

(三) 敬称の助辞「公」を添えた呼称

秀吉公（関白以前のもの）・三松公（斯波三松）・政宗公（伊達政宗）・浅弾公（浅野彈正少弼）・古織公・宗弥公（未詳・数奇仲間）

(四) 敬称の助辞「様」を添えた呼称

(1) 皇室、公家に対しての呼称

禁中様・正記町院様・親王様・女院様・若宮様・三之宮様・近衛様

△略称▽勸大様（勸修寺大納言晴豊）・菊様（菊亭右大臣晴季）・大覚様（大覚寺門跡尊信）・新門様（本願寺新門主教如上人）

(2) 関白秀吉に対しての呼称

関白様・相国様・内府様・上様（信長をさすことともある）

(3) 武将クラスの人物に対しての呼称

(a) 姓と官職名によるもの

△略称▽古織様・石少様（石田治部少輔三成）・富左様（富田左近将監知信）

(b) 官職名のみによるもの

宰相様（羽柴秀長）・大納言さま（羽柴秀長）・筑州様（前田筑前守利家）・越州様（細川越中守忠興）・越中サマ（細川忠興）・対馬様（山内対馬守一豊）・左衛門尉様（未詳）

(c) 名乗のみによるもの

家康様・政宗様

(d) 姓と名前によるもの

△略称▽羽与様（羽柴与一郎細川忠興）

(e) 名前のみによるもの

源五様（織田源五長益）・三助さま（織田三介信雄）・孫七様（羽柴孫七郎秀次）・与一様（細川与一郎忠興）

(五) 敬称の助辞「老人・和尚」などを添えた呼称

祐慶老人・古溪和尚・陽立和尚・立土知藏禪師

敬称を添えない、呼び捨ての呼称から述べていく。数奇仲間である町衆や剃髪者は、呼び捨てが普通のようなのである。同輩や下輩が多いという現実もあるうが、細川幽斉のような大名であろうと、妙喜庵の功叔和尚であっても呼び捨てである。ロドリゲスは、「宗教家及び剃髪した俗人で、我々が高い敬意を払ひたくない者に対して」助辞の「老」を添えるとしているが、利休書簡では「祐慶老人」（一九番）が一例である。ほかの敬称の助辞では、「公」を添えた「宗弥公」（二二〇）が一例ある。古田織部の書簡には、「宗ヶ老」⁽⁵⁾「昌琢老」⁽⁶⁾など「老」を添えた例がみられるが、利休では呼び捨てが基本となっている。

武将クラスの人物に対しても呼び捨てにする場合がかな

りある。(a)のような「姓と官職とによる」呼称も、略称は別として、フルネームによる場合は、書簡においても呼び捨てが基本である。「殿」を添える事もあるが、呼び捨てが多い。(b)の「官職名のみによる」呼称で、呼び捨てになっているのは、唐名である。唐名が呼び捨てでかまわないのは、唐名呼称にすでに敬意があるからであろう。(f)の「秀吉・家康」といった「名乗」の呼称も呼び捨てが基本である。敬意を添える場合には、「殿」を添える事はなく、「公」か「様」にしている。利休書簡の特色のようである。

ところで、呼び捨てにしていのであろうかと疑問を持つものがある。つまり略称である。「羽筑・古織」といった姓と官職名とによる呼称の略称、「弾正・民法」といった官職名による呼称の略称、「羽藤・古佐」といった姓と名による呼称の略称である。ロドリゲスは、「名字と官職名とを簡単に書く時には敬意が低くなるのであって、親しい間柄なり、内証(Inner)の書状なりで使われる」と述べている。利休書簡では、名字と官職名とにかぎらず、名字と名前の略称も使われている。そのことはかまわないわけであるが、問題は、その呼び捨てである。他の書簡例によれば、よほどの下輩でないかぎりには「殿」を添えるのが通常である。利休も、「様」は多くないが、「公」や「殿」を添える場合は

ある。けれども、かなり呼び捨てが存在するのである。呼び捨ての場合の宛先を見ると、数奇者か、芝山監物といった極く親しい人物である。呼び捨てにした人物も多くは茶の弟子である。従って遠慮のない間柄では、相手が部将であつても、仲間・同輩として扱つたのであろうか。

(d)の「名前のみによる」呼称の、「忠三郎・小平田」といった呼び捨ての呼称も気になる。事例のうち、「蔵介」は、当時、秀吉の敵方にあり、越中征伐の武將に送つた手紙のものであるから呼び捨てもかまわない。しかし、忠三郎は、一国一城の主であり、小平田は、家康の名代として大坂城に祇候した使者であり、秀吉も丁重にもてなしている。それに対して呼び捨ては失礼であり、何よりもすでに名前で呼ぶそのことが失礼である。利休は自分を誇示するために呼び捨てにしてみせたのであろうか。しかしその必要があるとも思えない。略称の呼び捨てと同様に親愛感からの呼称であらうと思う。下輩扱いとみれば、利休の傲慢さとならうがやはり親愛感と見たい。

(e)の「姓のみによる」呼称法の呼び捨ては、島津義久に対する「島津」が一例である。宇治の茶師「上林惣三郎」を「上林」と呼び捨てにした例はあるが、武将では「島津」が一例である。通常は「殿」が添えられる。考えられ

る事は、「蔵介」と同様に島津義久も秀吉に敵対していた点である。手紙は、九州平定がなり、その喜びを伝えたものである。¹⁰⁾敵対関係であるがゆえに呼び捨てになったとすれば、姓の呼び捨ては好ましいものではないと言えよう。使用例が一例と言うのもそのためであろう。

次に、敬称の助辞を添えた呼称法について概観する。すでに、「姓と官職名による」呼称、「姓と名前による」呼称法の略称の呼び捨てについては、疑問に思う事を述べ、助辞については「様」は多くなく、添えるとすれば「殿・公」が一般的であると述べた。「様」が添えられるのは特別な事なのである。利休が秀吉の怒りに触れ、堺に蟄居を命じられた時、秀吉に遠慮して見送る者は、誰もいなかった。淀の渡し場に来た時、ひそかに見送る細川忠興と古田織部の姿を見付けた。利休は涙の出る思いであつたろう。その喜びを忠興の家臣の松井佐渡守に書き送った。¹¹⁾その書簡に「羽与様」「古織様」と書かれている。利休書簡では一回切りのことである。感謝の思いが「様」となつて表われたのであろう。武将に対して「様」で呼称するのは、よほどの事であることが知られる。

「官職名のみによる」呼称法については、唐名呼称の場合が基本的には呼び捨てであり、それ以外では、官職名には

「殿」が添えられるのが、一般的である。そして「様」が添えられるのは、武将では「越中サマ」と「対馬様」ぐらいである。これは後で述べる呼称の繰り返しと関係がありそうに思う。「芝山殿」「高山殿」といった「姓のみによる」呼称法も、「殿」を添えるのが一般的であつて、「様」を添えるのは、皇室が一部の公家に対してのみである。

「様」が高い敬意を示す尊称であることは、皇室や秀吉（一部では公家や信長）に対して専ら用いられている事で知られる。秀吉以外では、秀吉の異父弟の秀長が、「大納言」であり、「宰相」であるために公家として扱われ、「様」が添えられている。また、「筑州様」「越州様」「越中サマ」「対馬様」の四呼称が「様」である。対馬様の山内一豊と、利休の交際ぶりはよくわからないが、他の人物については、「様」で呼称されてもおかしうはない。しかし、これらの「様」呼称は、後で述べる呼称の繰り返しに関係がありそうに思われる。心からの尊称というよりも、別な事情があるように思う。

最後に、「名前のみによる」呼称法である。呼び捨てにする場合については、すでに疑問を述べておいた。「藤四郎殿」「新五郎殿」については、未詳であるが、宛て先の身内であろうと推定されている。相手の身内と言うことで

添えられた敬称と思うが、それとは違って、高い身分の人に對して、「名前に敬称の助辞を添えた」呼び方をする。

「三介殿・三助さま」は、信長の次男であり、「源五様」は、信長の弟である。「八郎殿」は、秀吉の養子であり、「孫七様」は、秀吉の甥である。いずれも主人の一族である。身分の高い人の名前に、敬称の助辞を添えて呼称する方法は、特に高い敬意を表わすものと思われる。親愛の情が、高い敬意となるのであろう。名乗に「様」を添えた「家康様・政宗様」については、特に理由を見出せなかったが、場面によつたものであろう。

以上で、概観ではあるが、通常の呼称法について触れた。やはり、呼称法の多様さに気が付く、微妙な待遇のありようと関わっているかとも思うが、うちとけた個人の書簡と云う事にも理由があるであらう。

三

利休書簡の人物呼称を調べていると、ある事実が気付く。それについて述べてみたい。それは、同一人物を繰り返し呼称する場合である。例えば、次の四十二番は、博多の豪商島井宗叱に宛てた書簡である。

御状拝見誠ニ御床しく存折節本望之至候仍卷物一端贈

給候爰調法ニ候下後以書状成共可申入処に好便無之故無其儀候其方珍御事も無之候哉唯今秀吉公從山崎大坂へ移申候細々見舞を申事候て堺二もしかゝと無之候おかしき躰共ニ候然者細々秀吉公御うわさ共にて候あれ今一度御上候へかしと今より朝暮存儀に候秀吉もゆかしかりニて候

一子細候て宗久茶入秀吉へ被上申候定而各々可被申候一去年はならしはの事度々候つる唯今は初花近日徳川殿より来候（以下略）

呼称を繰り返す場合、「秀吉公—秀公—秀吉」といった呼称の変移が見られる。次の場合は、

二百十二 三月十三日付堀帶刀宛自筆消息

明朝御隙入候は、今日午刻に御出あるへく候対馬さまへも申度候かしく

夜前爰許御出候よし候と唯今承候懸御目候者可申上候先一筆申候対馬殿も御出と承候同前に一服申度候明日御帰に候は、明朝可申入候つしま殿へ御申候て可被下候又今日御帰にて候哉承度候かしく

「対馬さま—対馬殿—つしま殿」といった繰り返しがみられる。書かれた順序から言えば、「対馬殿—つしま殿—対馬様」であらう。かな書きの変化もさることながら、敬称

の助辞が「殿様」と変移していることに注目される。

利休の書簡中、同一人物が繰り返し呼称される書簡は、二四通存在する⁽¹³⁾。そのうち十五通にこうした変移現象が認められるのである。「秀吉公—秀公」のケースには、次のようなものがある。

「七十八（天正十三年）八月廿二日付芝源内宛自筆書状

御陳の様子承度迄に細新迄以書状申候自然新公指合候者
いりかやの箱一つ進上候可預御披露候（以下略）

細井新助に対して「細新—新公」の短略化が認められる。

「二百五十二（天正十九年）正月二日付松井佐渡守宛自筆書状

追而申候踏皮一足ゆかけ一具くけ帯一筋表当春之祝儀
候彈さまへも二色進上候御届頼存候以上

新春珍重、猶以不可有尽期候

一 旧冬十日之脚状同廿八日見申候嘉例御小袖茶綾一ヶ到来誠二御懇と乍申奇特之御音信奉感候

一 不慮之御逗留只今二本松二浅彈御同陣是又奇特乍去御名譽二候上様も御耳二入御感に候

一 奥州一揆蜂起之事偏に政宗謀反之段無紛様二上様御耳へも入申候

一 羽忠を政宗武略之覚悟羽忠油断之様二被思召候就其去

廿八日以両使中様家康様御両所へ折紙被進候定而彈様へも可為同前候

（中略）

一 政宗に従霜台御返事之趣承候上様之思召と呉々同前に候何事を被申候ても会津通路取切之上は不入儀候事

（以下略）

この書簡には、「浅彈—彈様—彈さま」の短略化と、「浅彈—霜台」の言い換えが認められる。

二百三 日付欠芝監宛自筆消息

從筑州様杓御請取候て可然候町野殿折紙も請取申候就中
忠もしさま御札忝候筑もしへの御礼事我等皆々請取申候
何も相残済可申候間其刻尚可申談候忠もしさまへ能御報
不申候町殿へも御返事不申候呉々古織殿委放申候かしく
ここには、「筑州様—筑もし」（筑前守前田利家）、「町野殿—町殿」（蒲生氏郷の家老）の短略化が認められる。

二百七 七日付宗安公宛自筆消息

一 今朝羽筑へ刀算用之注文参候処に如此返札候三松公も一段御迷惑かりにて候へとも相国様御詮二付而色々我等も肝煎候筑公より如此候へハ尤可然候間花入を取かへし三松へ可参候いやにてハ候まししく候文牒三もしさまへ御かへし候へと可被申候（下略）

ここには、「羽筑—筑公」の短略化と、「三松公—三松」の、敬称省略が認められる。「三もしさま」は、「三松—三もしさま」の短略化のようであるが、「文躰……可被申候」とあるように文脈が相違するので、一続きの簡略化とは認められない。

五十三（天正十二年）六月十三日付宛名欠自筆書状写

寔被寄思食一折過当至極に候尚従是可申入候

御折紙拝領昨日従秀吉公御折紙到来候竹鼻城去十日に相渡候城中衆之は一柳一介牧村長兵贈候て長嶋帰城候直に秀吉は伊州へ御越被申候（下略）

ここには、「秀吉公—秀吉」の敬称省略が認められる。

百五十五（天正十五年）十九日付両三人宛自筆消息

此曉三人御出きとくにて候とかく思案候二色々申被下候ても不調候我等物を切々大黒を紹安にとらせ可申候はや舟をハ松賀嶋殿へ参度候又々とかく越中サマ御心へ分候ハてはいやにて候此理を古織と御談合候て今日中に御済あるへく候明日松殿ハ下向にて候何にとも早舟事さうさなく候是もむつかしく候越中殿へも心へ候て右如申候はや舟をは飛もし参候大くろを紹安に可被遣候事乍迷惑其分にすまし可申候已上かしく

「大黒・早舟」と名付けた茶碗を長男の紹安と松賀嶋殿であ

る飛彈守蒲生氏郷とに譲ることにしたので、両三人の申出には応じられないとした内容である。細川越中守忠興も納得してくれないので困ると述べている。ここには「松賀嶋殿—松殿—飛もし」の短略化、または呼称の言い換えが認められ、「越中サマ—越中殿」の敬称の変移が認められる。

二百四十三（天正十八年）六月十日付木村弥一右衛門尉宛自筆書状

政宗公唯今御尋之事外聞忝次第候仰御太刀一腰馬代金拾両拝悦是又過分尤唯今爲御礼可令伺候処に養生刻閑白様御成之時も不可罷出御法度蒙仰之条乍恐御礼令不参候御存旨貴所政宗様へ被仰上候者可爲本望候（下略）

ここには、「政宗公—政宗様」という敬称の変移が認められる。

二十八（天正九年）卯月一日付平勘兵衛尉宛自筆書状

（前略）

一四五日さきにとうきち郎殿のほりにて候あすはあつちへ御出にて候

（二箇条ほど中略）

一きのふ廿九日に羽藤ふるまい候てきよみつにてのふをさせられ候事のほかなるふるまいにて候

一きやうにて御よう候は、可承候又此方よりは米をかり

まいらせ候へく候恐々謹言

ここには、「とうきち郎殿—羽藤—」の言い換えが認められる。

二十九 七月十二日付末勤兵宛自筆書状

筑州へ藤四郎殿御礼被申大慶に候

一 住吉之事様子直に秀吉日を承藤へ申渡候

(二箇条ほど省略)

一 秀吉へ御音信おひた、しき鉢殊に酒一段并干飯著由候

藤仕合能候て我等迄本望候

一 貴所へ上さま両度まで申候能知候恐々謹言

ここには、「筑州—秀吉—」の言い換えと、「藤四郎殿—藤—」

の短略化が認められる。「上さま」は、信長のことである。

四十三(天正十一年) 七月廿七日付宛名欠自筆書状

瓢庵罷下候条一筆申上候(中略)

一 先度は大坂迄遠路御音信忝次第二候尚宗二申合候恐惶

啓白

ここには、山上宗二に対して「瓢庵—宗二—」の言い換えが

認められる。

百八十三 六月八日付民法印宛自筆書状

円乗坊迄尊書并生鮎百拝領過分至極令存候頓可遂賞翫候

此中先参候て御礼可申上候処に円如存知爰元忍にて居申

候条態参ても不申入候明朝可参候忝奉存候恐惶謹言

ここには、「円乗坊—円—」の短略化が認められる。

百五十九 日付欠賀岡宛自筆消息

鮎一ヶ過分々々

上様御成と聞申候者人を可被下候可罷出候妙法院さま晩

景御振舞にて致伺公候定北野御茶上成昼可被聞之由候て

今可参之由二候其分二候

右二申候御成事聞申候者妙へ人を可被下候

ここには、「妙法院さま—妙—」の短略化が認められる。

五十四(天正十二年) 七月十八日付宛名欠自筆書状

徳雲我等「」三井寺にて御報申候秀吉大かきへ今朝

「」にて候徳も御「」存候(以下略)

以上が十五通に見られる変移である。変移の内容をまと

めてみると、

(ア)「円乗坊—円—」「藤四郎殿—藤—」などのような一字短

略。それに「町野殿—町殿—」「羽筑—筑公—」「浅弾—弾

様—筑州様—筑もし—」のように「殿・公・様・もし—」

の助辞を添えたもの。

(イ)「秀吉公—秀吉—」「越中サマ—越中殿—」などのような

敬称の助辞の省略、同じく言い換えによる変移。

(ウ)「とうきち郎殿—羽藤—」「筑州—秀吉—」などのような

呼称の言い換えによる変移、となる。

なぜこのように呼称の仕方を換えるのであろうか。(ア)の一字短略化は、繰り返す面倒を省いて簡略表記をしたと考えられる。それにしても大胆な簡略法である。面倒を省くというよりも簡略表現をするそのことに本領がありそうな気がする。(イ)の敬意の変化は、「秀吉公—秀吉」「越中サマ—越中殿」のように敬意を下げていく場合と、「対馬殿—対馬さま」「政宗公—政宗様」のように敬意を上げていく場合とがある。上げる場合は、自然なように思うが、下げていくのには何か意図的なものを感じる。(ウ)の呼称の変化は、「瓢庵—宗二」のように最初を敬意の高い呼称にし、後は、通常の呼称にしていく傾向が認められる。繰り返しになるが、それにしてもなぜこのように変化させるのであろうか。偶然とは言い難い実例数である。

他の書簡例を「大日本史料」等で探索し、比較考察することが一方法であろう。⁽¹⁴⁾今は全く便宜的な方法であるが、桑田忠親著作集全十巻に所収されている書簡集を参考にしてみた。戦国武将の書簡が「戦国武将の手紙」として巻三に収められ、信長・秀吉・家康の手紙も「織田信長の手紙」「太閤秀吉の手紙」「徳川家康の手紙」等の項目で各巻に収められている。巻七には、戦国女性の手紙、巻十には、古田織部の手紙が収められている。原文のままもあれば、

解説された状態のものもある。

しかし、利休書簡のよう変移の例は見当らなかった。唯一、毛利元就の手紙に、

児玉三郎右衛門殿所へ御状、披見申し候。立花表に至つても申せしめ候いつ。こんど異儀なく御取り退き候事、本望の至りに候。いずれもこれより、此等の儀、わざと申すべきの条。先ず以て、筆を閑き候。なお、児三右所より申すべく候。恐々謹言。

(永禄十二年)極月十日

元就御判

乃美兵部丞殿御宿所⁽¹⁵⁾

「児玉三郎右衛門殿—児三右」の簡略化らしきものが見られた。しかしこれは言うまでもなく書簡によく用いられる略称であり、利休の一字略称とは性質の違うものである。利休書簡のこの繰り返しに見られる変化は、偶然ではなく何か意図的なものを感じる。しかし今のところ理由はよくわからない。ただこうした呼称の変移に利休書簡のこだわりのない自由さを感じてならないのである。

四

呼称を繰り返す時の一字略称の事を述べた。しかしこれら一字略称が、繰り返す時の便法としてのみでなく、書簡

の中で単独でよく用いられ、変った呼称法になっていることを次に述べる。

二百二十七 十一月十八日付宛名欠自筆書状

從堺昨日此方へ參候態參候て不申上候御透二一服と存候へ共無御隙候由^〇被申候間待申候是非共と存計候尚^〇可被申候恐惶謹言

百九十五 菊月廿二日付伊勢某宛自筆書状

(前略)

的便候条一筆申候仍南坊昨日午刻二宮古を立被申候淺彈少書状を罷下申候先々仕合目出度下向候て本望此事存候御心底可為同前と奉存候芝^〇本望由被申候(以下略)

九十五 日付欠芝源宛自筆消息

只今從御城歸候薰^〇の書状進之候殿大機嫌御推量あるべく候(以下略)

五十 日付欠竹齋宛自筆消息

あまりにけも無之書物にて候猶^〇祐まで此由申度候(以下略)

百三 三月晦日付妙庵^〇宛自筆消息

(前略) 老後御たのしみと存色々二候而進之候掃^〇右之一貫返候を女房衆に預けおき候

傍線を施した部分にそれぞれ一字略称の人物呼称が見ら

れる。「^〇」は^〇乗坊、「芝」は芝山監物宗綱、「薰」は今井宗薰、「祐」は未詳、「掃」は上林掃部、それぞれの略称である。

「桑田忠親著作集」所収の書簡類から類例を求めていくと、次のような例があった。伊達政宗が属将の中島伊勢守に送った書簡に、

(前略) 此の表の義、定めて心元なくこれあるべく候や。

佐・会の其の外、三四家相談を以て、郡山に向い陣に及ばれ候。誠に希うところに候の条、則ち打寄り、相近き、対陣に及び候。然りといえども、間切所について、互に何事なく候いき。幾説も佐陣敗北たるべきのよし、告げ来たり候いき。(後略)

(天正十六年) 六月十九日

政宗

中 伊⁽¹⁶⁾

「佐」は佐竹義重、「会」は会津の芦名義広の略称である。「対陣に及ぶ候」とあるように政宗の敵方の人物である。

来札の如し、大内備前守二本松へ懸け入り、詫言に及び候条、赦免せしめ候。これによって彼の表いよいよ種々の義ども告げ来たり候いき。田の事も、三春上下、爰元へ一味の旨候間、これまた心元なくこれあるべからず候。

(後略)

(天正十六年) 卯月十四日

政宗

中島伊勢守殿

文中に「田」とあるのは、田村清顕のことと、「心元なくこれあるべからず」とあるようにこれも政宗の敵方である。一字略称は、いずれも敵方の人物であつて、相手を軽蔑した感情的な呼称かと思われるが、次のような例もあつた。

(前略) さりながら敵陣取りにたて籠り、合戦に及ぶべき体これなき由、申し候。藤孝御参会候や。御ゆかしく候。叱・前・徳雲御ことづて申したく候。恐々謹言。

五月四日

光秀

臨江斎

惟日

床下⁽¹⁷⁾

西国出陣中の明智光秀が、連歌師の里村紹巴に宛てた書簡である。「叱・前」とある一字略称は、紹巴の弟子の里村昌叱と里村心前のことである。連歌をとおしての親しい間柄でもあろうし、内容からしても軽蔑した呼称ではない。一字略称は、下輩扱いの呼称であつて、場面によつては、相手を軽視した呼称にもなれば、遠慮のない呼称にもなるのであろう。

一字略称は、礼になつた呼称法とは言えないが、利休以外の書簡にも見出せることが認められた。利休の場合、

妙法院門跡に対する「妙」とか、宛先の身内かと思われる藤四郎殿の「藤」を見ると、繰り返す時の省略としての一字略称と、単独に用いる一字略称とはニュアンスに違いがあるように思われる。繰り返すということの下輩感が薄れるのであろう。いずれにしろ、失礼とも思われるような一字略称法が利休書簡に多く見られることは注目される。

次に、敬称の助辞を添えた場合を見ていきたい。「殿」を添えた例は、すでに取り上げた「松殿」(百五十五)と「町殿」(二百三)の二例のほかは見出せなかった。

「公」を添えた例は、すでに取りあげた「秀公」(四十三)、「新公」(七十八)、「筑公」(二百七)の三例のほかに次のような例があつた。

七十四(天正十三年) 七月八日付松新公宛自筆書状

追而申候幽斎越公へも指計無之候間別紙に不申候此書中申入度候(以下略)

二百一 日付欠芝監宛自筆消息

今朝忠公へ茶を申候貴所御壺又茶御上意にて候弥々能候哉上様御上洛候間今日者御城へ出可申と存候かしく

三十三 三月八日付末勘公宛自筆書状

(追書文省略)

從祐公_{樽式}荷給候御心得所仰候殊更細々新坊御出本望候

(一箇条省略)

一作事漸に出来候見物に早則被下候延引候者秀公御陣の事も可聞候(以下略)

二百四十八(天正十八年)九月八日付木弥一右宛自筆書狀御礼過分至極来十一日朝御口切事候去年事存出別而忝次第に候古公致同道參候て御心添可給候恐惶敬白

「越公」は細川越中守忠興、「忠公」は蒲生忠三郎氏郷、「祐公」は未詳、「古公」は古田織部重然のことである。それぞれ相当の地位の人物であるが、茶をとおしての親しい弟子である。宛先も利休書簡でしばしば名の出てくる親しい間柄である。一字略称が遠慮のない呼称であることを物語っているが、「公」が添えられているので失礼にはなっていない。落語などに登場してくる留公とか八公といった庶民的な呼称とは性格が違っている。「公」の敬意が十分に生きており、相当の人物にしか用いていない。著作集によれば、もちろん利休書簡にも出てくるが、「三左公」⁽¹⁸⁾(池田三左衛門尉輝政)とか、「曾兵公」⁽¹⁹⁾(曾我兵庫頭助乗)など、通常の略称に「公」を添えた例は出て来たが、一字略称形のものは一例も見当らなかった。

「様」を添えた例は、すでに取りあげた「彈様」(二百五十二)のほかにな次のような例があった。

二百二十五 十月五日付浅少宛自筆消息

就中様御光臨に雁一鯉一ヶ忝候又明朝御しやうはんハ三松と被仰出候又残之御茶之時分ニ不干を我等に同道可仕之由御諒ニ候為御心得申候恐惶かしく
百三十一 十月十八日付松新宛自筆書狀

(前略)

一与様御茶事に色々からかい我等かち申候就其閑白様時雨と申大壺さるかたより上申候与様可被参之由候内々我等より申遣候へく候間早申入候(以下略)

百九十四(天正十六年)八月十六日付少庵宛自筆消息
来十八日朝輝様御茶を申上度候急度被伺候て返事まち候然者次迄成共佐世殿堅田兵部殿御所御供候て残御茶一服聞召候様ニ可申候先輝様へ伺返事待候かしく
百三十九(天正十四年)極月四日付黒勘宛自筆書狀

(前略) 仍色紙別而可為御秘藏候一段見事に存候明日尾張へ御越中様へ御心得候て可被下候(以下略)

二十七 日付欠森伝公宛自筆消息

茶杓貴所之御用と申候間此者に忝つ進し候我等取ておき申候又此きんらんの袋を慶様へ被参て可被候かしく

「中様」は、羽柴中納言秀次のことである。黒田勘解由孝高に宛てた書簡中の「中様」は、別人であるが、誰であるかは未詳である。「与様」は細川与一郎忠興、「輝様」は毛利輝元である。「慶様」については未詳である。江戸時代の遊女が馴客を「徳さま」と呼んだりする印象からすると、利休書簡のこれらの呼称に違和感をおぼえるが、そうしたものは違つたまじめな呼称法である。

著作集によると、次のような例があつた。

(前略) めでたき御事、かならず参り候て申すべく候。かしく

五月三日

秀さま 御返事⁽²⁰⁾

伏見より

大かうと、⁽¹⁹⁾

秀吉の、愛児秀頼に宛てた自筆書簡に「秀よりさま」のほかに、「秀さま」の呼称が一例見出せた。

『定本千利休の書簡』の中にも

「メ 少庵まいる

此はな入から日本物見わけかたく候休様へ被懸御目候て可給存分仕ハ一段とおしき物にて候恐々かしく

三月七日

紹安⁽²¹⁾

利休の長男・紹安が弟の少庵に宛てた手紙で、花入が唐の物か、日本の物かよくわからないので、父の利休に鑑定し

てもらつてくれと頼んだものである。利休を「休様」と呼んでいる。

わずか二例にすぎないが、一つは、目にいれても痛くない愛児、一つは、尊敬すべき偉大な父に対しての呼称である。心からの敬意と親愛の情のこもつた呼称である。言つてみれば、最上位の身内呼称というべきものかもしれない。利休の場合、細川忠興の家臣で、親しい間柄でもある松新に対して、その主人の忠興を敬愛して呼称した事情は理解できる。毛利輝元についてはどうしてなのか、よくわからないが、身内呼称ともいふべき呼称法で、これらの人が呼ばれたのであろう。私信であるがゆえにこうした呼称法の使用を見ることができるのであろうと同時に、利休のこだわりのない人柄を見る思いがする。「筑公・秀公」などについても同様に、利休のこだわりのない自由さを見る思いがする。

最後に、「もし」言葉を添える呼称法について見ておきたい。すでに取り上げた「筑もし」(二百三)、「三もしさま」(二百七)、「飛もし」(百五十五)のほかにも次のような例がある。

百七 五月四日付松新宛自筆消息

夜前者与もしさまに夜放候て放申候大仏御普請にはや御

出候ハ、かの焼茶を可被下候よそへ御やりあるましく候
恐惶かしく

百十二(天正十四年) 七月七日松新公宛自筆書状

(前略) 今度越もしさま大石を被引候処、関白様石の上にて御音頭をとられ候事爰元其かくれ無之候御名譽に候貴老御心底奉察候就夫越もしさまへ以書状申入候御届願申候(以下略)

百六十四 正月廿九日付慶忠宛自筆消息写

(尚々書省略) 子持かたへ懇二色々給候由申候忝存候しかれハ忠もしさまより早荊のから籠御拝領候間本歌御尋にて候

春日野にかよふ心のおとこ山とめて身にしむさをしかのこゑ

其分をハ面上ニ可申候恐惶かしく

「筑もし」は前田利家、「飛もし・忠もし」は蒲生氏郷、「与もし・越もし」は細川忠興のことである。三人に用いられている。「三もし」は、別に論じる。三人は、言うまでもなく利休と親交の深った人であり、援助者でもあったろう。「もじ」言葉には、相手を大事なものととして扱っている印象がするのである。

著作集を見ると、信長が娘の冬姫に宛てて「ふもじ」御返

(22) 事」と用い、秀吉も、北の政所ねねに宛てて「ねもじ」、側室とらに宛てて「ともじ」(23)を用いている。いずれも男性が女性に宛てた手紙である。虎明本狂言集「八尾」に、男性である八尾の地蔵が男性である閻魔王に「えんもじまいる」と手紙をした事が描かれているが、これは男女に見立てての展開である。女性から男性、男性から女性への手紙に「もじ」言葉は用いられるのであって、利休書簡のような用法は出て来ない。どう理解すればいいのであろうか。

ヒントになるかと思われるのが、すでに引用した二百七番の書簡である。斯波三松の所有していた花入を秀吉が所望した。しかし花入は三松から別人に渡っていた。利休が窮状を見かね、宗安に依頼したものである。「文鉢三もしさまへ御かへし候へと可被申候」と宗安に書く内容を教示している。宗安が手紙を出す相手というのが、男性か女性かわからないと言えるが花入を所有し、茶をするとなれば男性であろう。「三もしさまへ」の「もじ」言葉がどれ程の表現効果を持つものなのかはわからないが、この一文が男性間での「もじ」言葉の使用をよく暗示していると思う。男性同士の「もじ」言葉使用は疑い得ないのではなからうか。それはひょっとすると、数奇人達の客に対するうちとけた位層的表現かもしれない。今後の調査に待ちたい。

利休という一個人の書簡が、茶掛けなどとして愛好されたということもあろうが、数多く残されている。一個人の書簡をとおしてその人物呼称を調べたが、通常の呼称においては多彩な呼称法を見せていた。呼称法のすべてが使用されているとも言ってもよからう。場当たりな不意な人物呼称の結果なのか、心遣いの結果なのか、問題は残っている。利休書簡の人物的呼称で異様で注目されるのが、繰り返し返しの呼称法と一字略称の呼称法であった。繰り返し呼称法での簡略化とか言い換え法には、同一呼称を繰り返すわずらわしさや書く手間を省いたとしか、今のところ理由を考え得ないが、印象としては変化の新鮮さや自由さ、大胆な省略法のユーモアを感じるのである。利休書簡の個性となっているように思うのである。尊敬の助辞を添えた単独の一字略称法についても、失礼な呼称法かもしれないのに、暖かい人間味を感じる思いがし、それもまた利休書簡の魅力となっているように思うのである。茶人の私信としての身軽さに原因があるのであろう。

注

- (1) 昭和四十六年三月 東京堂出版
- (2) 村井康彦『千利休』(昭和五十二年NHKブックス)。桑

田忠親著作集第九卷『茶道と茶人』(昭和五十五年秋田書店)。桑田忠親『千利休』(昭和五十六年中公新書)などに代筆問題の論議が収められている。

- (3) 書簡番号九十の宛名欠の自筆書簡に、「少庵さま大覚様其外三人殿下御成にて候次へ致伺公候条」とあって、次男の少庵に敬称の「さま」が付けられている。代筆の疑いのある書状かどうかはわからないが、疑わしい事象ではある。

- (4) 土井忠生先生訳「ロドリゲス大文典」五七五頁

- (5) 桑田忠親著作集第十卷「茶道と茶人」(三) 六五頁下

- (6) 同書八二頁下

- (7) 「ロドリゲス日本大文典」七〇九頁

- (8) 「七四(天正十三年)七月八日付松新公宛自筆書状」によるもので、「蔵介国を明候而内府様へ渡被申敷二つに相定」と人質を出すか、国を明け渡すかの二つに、蔵介の処置が決定したことを伝えている。

- (9) 「百十(天正十四年六月八日付小平田宛自筆黒印状)」によるもの。「大納言様 小平田 宗易御茶にて 床 茄子内あか盆に入……」とあるように小平田を招いた茶会での記録を書いて渡している。本人に対して本人を呼び捨てにしているのである。
- (10) 「百五十三(天正十五年)四月十二日付芝監物宛自筆書状」によるもの。「島津御侘言事察候」と九州遠征中の芝山源内に送っている。

(11) 「二百六十（天正十九年）二月十四日付松佐宛自筆書狀

態々御飛脚過分至極候富左殿柘左殿御両所為御使堺迄可罷下之旨御詫候条俄夜罷下候仍淀迄羽与様古織様御送候て舟本にて見付申驚存候忝由頼存候恐惶謹言

(12) 「家康様」は、「二百五十二（天正十九年）正月二日付松

井佐渡守宛自筆書狀」による。奥州一揆の背景に政宗がおり、「就其去廿八日以両使中様家康様御両所へ折紙被進候」と秀吉が家康に出馬を要請したと伝えたもの。要請といったことに心理的働きがあつたか。

「政宗様」は、「二百四十三」による。呼称の繰り返しパターンと影響があるか。

(13) 書簡番号を示すと、28・29・32・33・42・43・48・49・

53・54・103・112・131・155・161・183・189・194・203・207・212・232・243・252の24通である。

(14) 『鎌倉遺文』は、三卷にわたって人名索引が整えられているので、それは調べた。

(15) 桑田忠親著作集第三卷「戦国武将」二二九頁

(16) 同じく著作集第三卷二九八頁上と二九六頁下とに所収。

(17) 同著作集第二卷二二四頁上

(18) 同著作集第十卷七一頁上。古田織部から有馬玄番頭豊に宛てた書簡

(19) 同著作集第二卷二二四頁上。明智光秀の書簡

(20) 同著作集第五卷三〇三頁上。「太閤秀吉の手紙」より

(21) 「定本千利休の書簡」四〇三頁

(22) 桑田忠親第四卷「織田信長」二六一頁下

(23) 同著作集第五卷「豊臣秀吉」二六九頁下および二七八頁下